

トビウオ通信 (2月号)

<http://www2.pref.shimane.jp/suisi/>

(TEL 0855 22-1720)

《平成 16 年まき網漁業の動向》

今月号は島根県に所属する中型まき網漁業（15ヶ統）の平成 16 年の動向を振り返ります。

漁獲量、水揚金額ともに増加！！（1統あたり漁獲量は平成 7 年以降最高）

平成 16 年の中型まき網による総漁獲量は 6 万 7 千トンで前年の 106%、平年（過去 5 年間平均）の 98%、総水揚金額は 51 億 9 千万円で前年の 113%、平年の 91% となりました。量、金額共に平年を下回っていますが、これは平成 11 年には 29 ヶ統操業していたものが、平成 15 年には 15 ヶ統にまで減少したためです。

図 1 に示した 1 ヶ統当たり漁獲量は、マイワシの漁獲が好調であった昭和 58 年から平成 6 年まで高水準にあり、ピーク時には 7,090 トン/統を記録しました。その後は、マイワシの減少に伴い急落し、年変動が大きくなっています。平成 13 年にはマサバ、カタクチイワシが不漁のため 1,640 トン/統にまで落ち込みました。最近では、マアジ主体の漁獲で 3 年連続の増加となりました。平成 16 年の 1 ヶ統当たり漁獲量は、4,438 トン/統で前年の 106%、平年の 139% となりました。これは、マイワシの漁獲量が減少し始めた平成 7 年以降では、最高の値となりました。また、1 ヶ統当たり水揚金額は 3 億 5 千万円/統で前年の 113%、平年の 132% とこちらも好調でした。

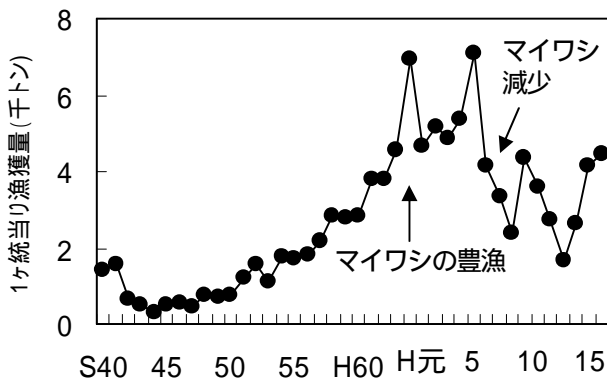


図1 島根県の中型まき網における1ヶ統当たり漁獲量の経年変動

ため 1,640 トン/統にまで落ち込みました。最近では、マアジ主体の漁獲で 3 年連続の増加となりました。平成 16 年の 1 ヶ統当たり漁獲量は、4,438 トン/統で前年の 106%、平年の 139% となりました。これは、マイワシの漁獲量が減少し始めた平成 7 年以降では、最高の値となりました。また、1 ヶ統当たり水揚金額は 3 億 5 千万円/統で前年の 113%、平年の 132% とこちらも好調でした。

魚種別漁獲量と水揚金額の動向

図 2 に魚種別漁獲量と水揚金額の動向を示します。水揚金額は漁獲量が最低となった平成 13 年以降も、横ばいもしくは減少傾向でしたが、平成 16 年は増加に転じました。

魚種別漁獲動向を見ると、平成 12 年以降マイワシの漁獲は、ほとんど見られなくなりました。平成 13 年にはカタクチイワシの漁獲が減少し、過去最低の値となりました。平成 14 年以降は、毎年何らかの魚種が増加し、総漁獲量は 3 年連続の増加となりました。

平成 16 年はカタクチイワシ（5,449 トン、前年比 38%）、マサバ（6,944 トン、前年比 78%）の漁獲量が前年より減少したものの、マアジの漁獲量が 3 万 9 千トンと前年を 1 万 5 千トン上回った（前年比 163%）ため、総漁獲量では前年を上回る結果となりました。

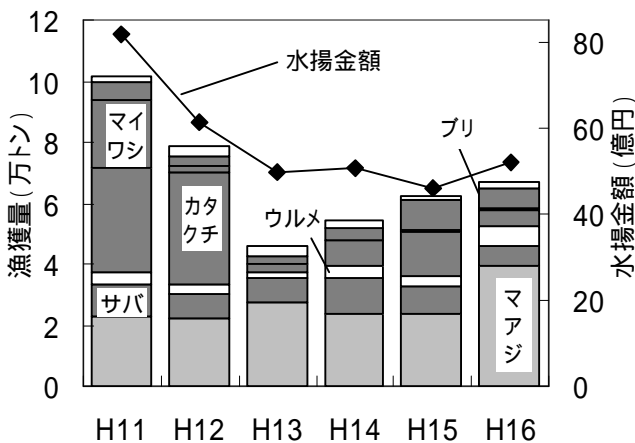


図2 中型まき網における魚種別漁獲量と総水揚金額の変動

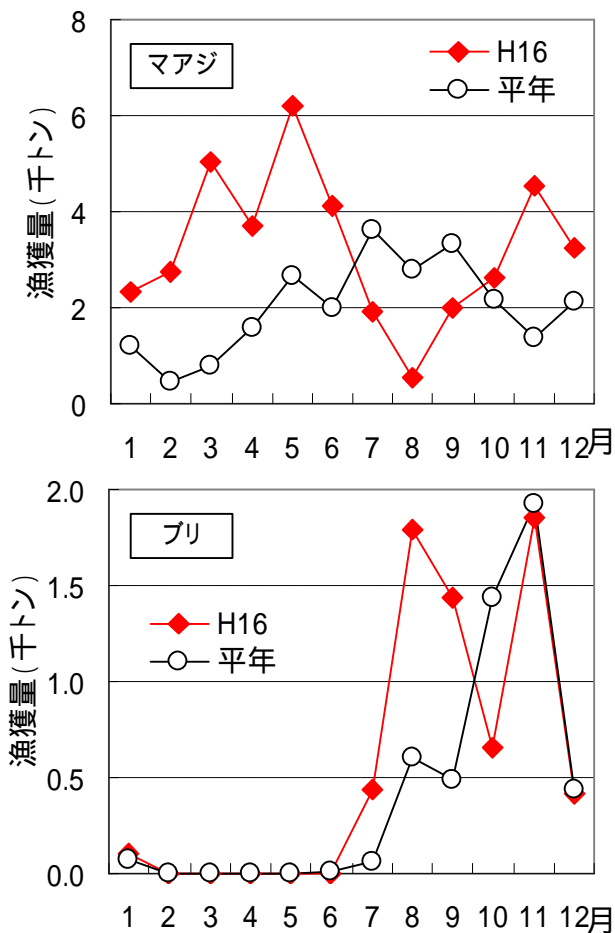


図3 マアジ、ブリの月別漁獲動向

マアジ好調！！

東は漁獲量アップ！ 西は“どんちっちあじ”好調！

図3に平成16年に漁獲が好調であったマアジとブリの月別漁獲動向を示します。

マアジは夏場を除いて各月とも平年を上回る漁獲となりました。漁獲量の約9割が県東部で漁獲されたもので、特に6月までの県東部の漁獲量は平年の2.4倍と好調に推移しました。これはマアジの加入量が増加しただけではなく、1～6月に県東部を中心に漁場が長期間に渡って集中的に形成されたためです。

県西部では、ほぼ平年並みの漁獲量でしたが、昨年5月9日から全国に向け販売を開始したニューブランド“どんちっちあじ”^{注1)}に代表される全長20cm前後の型の良い個体の漁獲が好調でした。漁獲量が減少した夏場にも、量は少ないものの安定して漁獲されたため、水揚金額は平年を上回りました。

一方、昨年のブリ月別漁獲量は、8・9月と11月の2つのピークがあり、一昨年に引き続き好漁でした。ブリの漁獲量は、平成15年に急増し10、11月に県東部で全長40cm前後の0歳魚（平成15年生まれ）が、まとま

て漁獲されていました。平成16年の夏場（7～9月）に漁獲されたブリは、全長60cm前後の1歳魚（平成15年生まれ）で、平成15年秋に漁獲された群れが成長したものでした。10月に一旦漁獲が減少した後、11月には県東部を中心に再び漁獲が増加しました。11月以降は、1歳魚（平成15年生まれ）だけではなく、全長40cm前後の0歳魚（平成16年生まれ）や全長80cm前後の2歳魚（平成14年生まれ）が漁獲されていました。

今後の漁況予測について

今後の主要魚種の動向について予測をしてみます。マアジは、春先の漁獲主体である1歳魚（平成16年生まれ）の漁獲量は平成16年を下回ると推測されます。しかし、2歳魚（平成15年生まれ）の資源水準は高いことから、銘柄“豆”～“小”の中型の漁獲量は前年を上回ると考えられます。ただし、漁場形成の状況によっては、海域による漁獲量の変動幅が大きいでしょう。マサバは昨年12月から比較的まとまって漁獲されており、平成16年をやや上回ると期待されますが、資源状態は依然として低位です。カタクチイワシは、平成16年秋に九州沿岸でやや漁獲が好調であったものの、資源状態は低位であり平成16年並みで平年を下回る漁況と考えられます。

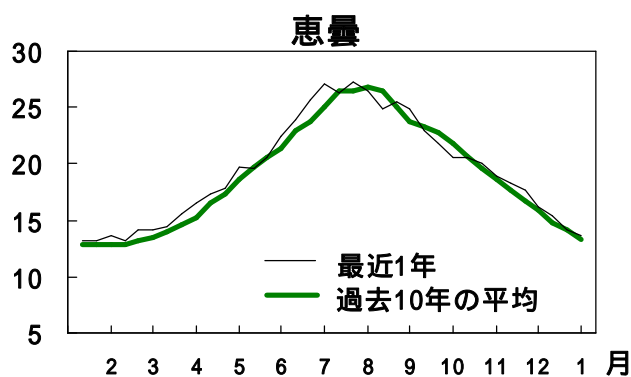
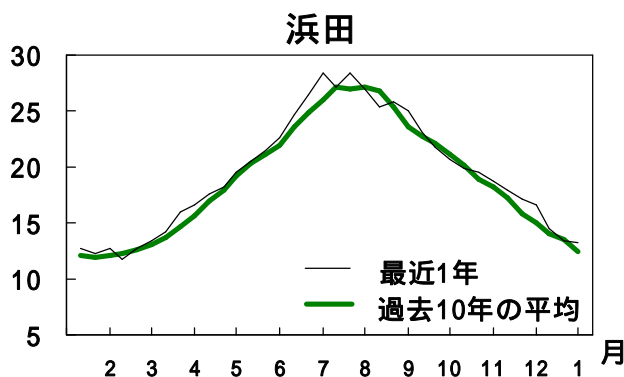
注1) どんちっちあじ：脂ののった旬の浜田産マアジをPRするため、平成16年から浜田市水産物ブランド化戦略会議で規格化されたブランド

規格： 浜田のまき網船で漁獲された高鮮度のもの 4～8月の旬に限定
脂質10%以上、重さ50g以上 漁場、生産者情報の開示

《 1月の海況 》

1月	月平均	平年差	評価
浜田	13.7	+0.4	平年並み
恵曇	14.4	+0.3	平年並み

1月の月平均水温は、平年より暖かかった12月に比べ浜田で3.5、恵曇では3.1下降しました。浜田、恵曇ともに「平年並み」となりました。



島根・鳥取県の各水産試験場が実施した海洋観測結果(1/24~1/25)によると、表層(0m)は11.0~15.1(平年差は-1.5~+2.3)、中層(50m)が10.2~15.3(平年差は-1.8~+2.5)、底層(100m)が2.8~14.7(平年差は-7.0~+3.4)となっていました。沿岸域では各層とも14台の水温で、昨年同時期を約1上回っていました。表層から中層まで、ほぼ同じ水温分布を示し、西側の沖合海域では平年よりも水温が低く、東側の海域では平年より高めとなりました。底層では、隠岐諸島北西約50マイルに発達した冷水域が見られました。平年と比較し冷水域の中心が隠岐諸島より位置しており、隠岐諸島西方の沖合海域では、平年より低めとなり最大で7も低くなっていました。逆に、隠岐諸島東方海域では沿岸から沖合まで水温14前後の暖水が広がり、平年より2~3高くなっていました。

山陰沿岸海域の水温は、表層では「かなり低め~かなり高め」、中層では「かなり低め~はなはだ高め」、底層では「はなはだ低め~かなり高め」となっています。

《 1月の漁況 》

【中型まき網漁業】

浜田の中型まき網の総漁獲量はマアジ、マサバ主体に734トン、総水揚金額は3,687万円でした。1統当りの漁獲量は245トンで、平年(過去5年平均)の155%、前年の960%でした。同じく水揚金額は1,229万円(平年の114%、前年の245%)でした。通常1月の漁獲の主体はマサバですが、今年はマアジの漁獲が平年を大きく上回り、全体の9割を占めていました。

西郷では、マアジ、マサバ主体に総漁獲量1,878トン、総水揚金額は1億5,926万円でした。1統当りの漁獲量は376トン(平年の109%、前年の78%)、水揚金額は3,185万円(平年の109%、前年の108%)となりました。総漁獲量は前年を下回ったものの、マアジの平均単価が90円/kgと昨年の約2倍であったことから金額は前年を上回りました。

浦郷ではマアジ、マサバ主体に総漁獲量938トン、総水揚金額は5,513万円でした。1統当りの漁獲量は234トン(平年の147%、前年の67%)、水揚金額は1,115万円(平年の124%、前年の69%)でした。

【イカ釣漁業】

浜田港に水揚げするイカ釣船(5トン以上)の漁獲量は、スルメイカを中心に16トンで平年の5%、前年の35%、水揚金額は118万円(平年の11%、前年の54%)でした。西郷のイカ釣船(5トン以上)の漁獲量はスルメイカ主体の3トン(平年の10%、前年の6%)となりました。浜田、西郷ともに、1月に入ってもスルメイカの漁獲が見られず、平年を大きく下回る低調な漁模様となりました。これは、1月時点でのスルメイカ漁場が竹島の南方や見島~対馬の間の海域に形成されたため、島根県での漁獲が極端に少なくなったためと推測されます。

【沖合底びき網漁業】

浜田港ではキダイ、ケンサキイカ、アンコウが漁獲の中心でした。1統当り漁獲量では前年を6%、水揚金額では23%上回り、平年(過去10年平均)に対しても21%(量)、37%(金額)上回りました。資源的に増加傾

向にあるキダイは前年の2.2倍、アンコウは1.5倍の漁獲がありました。カレイ類ではムシガレイが前年を42%上回りましたが、資源状態が悪化しているソウハチは前年の52%に留まりました。

恵曇港ではカワハギ類、アカガレイが漁獲の中心でした。1統当り漁獲量では前年同月の3.3倍、水揚金額で73%上回り、平年に対しても2.6倍(量)、32%(金額)上回りました。魚種別ではカワハギ類が前年の515倍の漁獲があり、全体の漁獲量の56%を占めました。またアカガレイでは67%前年を上回る漁獲がありました。

【小型底びき網漁業】

大田市・和江漁協ともに、出漁日数が前年の7割に留まったため、漁獲量で77~81%、水揚金額は67~71%に留まりました。大田市漁協の主な漁獲物はニギス、ソウハチ、アンコウでした。ニギスでは前年同月の漁獲量を61%上回りましたが、ソウハチは41%、アンコウは43%下回りました。

和江漁協ではソウハチ、ニギス、アンコウが主に漁獲されました。ソウハチは前年同月の漁獲量を55%、アンコウは22%下回りましたが、ニギスは31%上回っています。

その他の魚種では、和江漁協でヒレグロ、ケンサキイカが(前年比106%、166%)まとまって漁獲されています。

【定置網漁業】

県西部は漁獲量・水揚金額は前年および平年を上回りましたが、県東部、隠岐では、漁獲量・水揚金額ともに前年および平年を下回りました。県東部ではマアジ、タチウオが主体で、その他ではクロマグロ、ソウダガツオ、ケンサキイカなどが漁獲されています。県西部ではケンサキイカが主体で、その他ではタチウオ、スズキ、ブリ類が漁獲されています。県東部と県西部ではこの時期としては珍しくタチウオの大漁がありました。隠岐ではマアジが主体で、その他ではヤリイカ、ブリ類が漁獲されています。この時期、隠岐で主体となるスルメイカはほとんど漁獲されませんでした。

【釣・縄】

県東部では漁獲量は平年を下回りましたが、前年を上回りました。水揚金額は前年および平年を上回りました。県西部では漁獲量・水揚金額ともに前年を下回りましたが、平年並の漁獲となっています。隠岐では漁獲量・水揚金額は前年および平年を下回りました。県東部ではブリ、サワラ類が主体で前年の約30~40倍の漁獲量となっています。その他ではヤリイカ、メダイが漁獲されています。県西部と隠岐ではメダイが主体ですが、前年の5~7割の漁獲量となっています。県西部ではその他にブリ、アマダイ、マアジなどが、隠岐ではブリ、メダイなどが漁獲されています。

漁獲統計

平成17年1月1日 ~ 31日

漁業種類	水揚港	延隻数・統数	主要魚種	1隻(統)1航海当漁獲量	総漁獲量
中型まき網	浜田	22	マアジ	33.4ト	734ト
	西郷	52	マアジ・サバ類	36.1ト	1,878ト
	浦郷	35	マアジ・サバ類	26.8ト	938ト
イカ釣り (5トン以上)	浜田	47	スルメイカ	345kg	16.2ト
	西郷	11	スルメイカ	300kg	3.3ト
沖合底びき網	浜田	24	キダイ、ケンサキイカ、アンコウ	13ト	311ト
	恵曇	23	カワハギ類、アカガレイ	X	X
小型底びき網	大田市	149	ニギス、ソウハチ、アンコウ	603kg	90ト
	和江	210	ソウハチ、ニギス、アンコウ	661kg	139ト
定置網	浜田	20	ケンサキイカ、タチウオ、ブリ類	200kg	3.9ト
	美保関	85	マアジ、ソウダガツオ、サワラ類	404kg	34.3ト
	浦郷	75	マアジ、ヤリイカ、スルメイカ	124kg	9.3ト
釣・縄	浜田	572	ブリ、メダイ、アマダイ	27kg	15.4ト
	五十猛	200	メダイ、カサゴ、メバル類、アマダイ	28kg	5.5ト

: 1隻(統)1航海当漁獲量は総漁獲量÷延隻数・統数で算出しており、四捨五入した値です。

: 個人情報保護のため非公開